

2022年6月19日 礼拝説教要旨
詩編講解説教112「善き業のいろは」
詩編112：1～10、ヨハネ15：1～5

前回の第111編は神さまの救いの御業を讃える内容となっておりました。特に出エジプトの御業がここに示されております。例えば111：5の「糧を与え」がマナの話、111：6の「嗣業」が約束の地カナンというようにイスラエルの人々がこれを聞くとすぐに「ああ、出エジプトの話だ」と思い起こすことができる。そういう内容になっています。しかも「いろは歌」ですから幼い子どもがこれを歌いながら、神さまの救いの御業を覚えたのであります。ここに救いのいろは、信仰の基本があるのです。でもこれだけでは不十分なのです。その救いを体験した者が今度はどう生きるか。わたしたちの生き方まで含めて神さまの救いを捉える必要があります。その生き方の部分が今日の第112編と理解してよいでしょう。いわばわたしたちの生活、生き方のいろはがここにあります。

まず第111編と第112編の対応関係を確認してみましょう。例えば111：3bと112：3b、111：4bと112：4b、111：5aと112：5a、111：8と112：8等々。このように二つの詩編は明らかに対応しています。神さまが憐れみ深いお方であれば、わたしたちも憐れみに富み、情け深い。神さまが糧を与えて養われるお方であれば、わたしたちも惜しみなく与える。神さまが堅固であるならば、わたしたちも堅固で揺るぎない。ここでわたしたちが心に留めたいことは、神さまの救いの御業とわたしたちの生き方が対（つい）になっているという点です。

山上の説教で主イエスが「あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい」（マタイ5：48）と教えられたことを思い起こします。神さまの完全にあなたがたも生きなさいと教えられます。いや、それは無理でしょうとわたしたちは尻込みしてしまうのですが、実はそうではない。それが可能になる道がある。それが洗礼を受けてキリストにつながるということです。そこにわたしたちが神さまの御業を生きる根拠があります。わたしたちの生活のすべてはこのキリストにつながることから始まっているということを意識したいのです。

その上で改めて112編を見ますと、ここでは富や豊かさが強調されています。3節「彼の家には多くの富があり」9節「貧しい人々にはふるまい与え」「ふるまい与え」というのは「散財する」という意味の言葉です。ばらまく。気前がよいということ。この言葉は新約聖書では放蕩息子が父親の財産を「無駄遣いした」（ルカ15：13）というところに使われます。そんな散財するほどわたしたちには富はないと思われるかもしれませんが、もちろんこれはわたしたちの富を言っているわけではありません。むしろわたしたちの中には何もありません。これは神さまの豊かさです。神さまにこの富の源泉があります。イエスさまにつながっていることで、わたしたちは神さまの富、莫大な神さまの資産にあずかることができる。それゆえに惜しみなく分け与えることができる。それがわたしたちの生きる命の源なのです。

ヨハネ福音書第15章にあるぶどうの木の譬え話を思い起こします。主イエスは言われます。「わたしにつながっていないさい。わたしもあなたがたにつながっている。ぶどうの枝が、木につながっていないければ、自分では実を結ぶことができないように、あなたがたも、わたしにつ

ながっていないければ、実を結ぶことができない・・・わたしを離れては、あなたがたは何もできないからである」(ヨハネ15:4~5) わたしたちが神さまに喜ばれるように生きよう、善き業に励もうとする時、このことを忘れてはいけません。神さまにつながっていることがそれを可能にします。逆に人間単独の業になってしまう時に、それは必ず自分を誇る自己栄化の道をたどるか、わたしたちは本来貧しいので長続きせず枯渇するかのどちらかなのです。

70年代以降、日本の教会、特にわたしたちが属します日本基督教団は間違った方向に向かいました。ご存知の方々も多いと思いますが、当時の反体制的な運動に触発、翻弄され、教会そのものを体制的として教会の信仰や制度を軽んじる思想が生まれてきました。教会など必要ない。礼拝よりもっと社会運動をすべきだ。当時の言葉で言えば、礼拝、信仰告白など「ナンセンス」と言われたのです。ミッションスクール、神学校までその影響を受け、学生たちはバリケードで学校を封鎖したりします。東京神学大学もそうでしたし、青山学院、関東学院、明治学院もそうでした。その結果、当時神学部があった青山学院、関東学院は神学部が廃止になりました。牧師を養成することができなくなりました。これは日本の教会にとって大きな損失でした。東神大は機動隊を要請しバリケード封鎖を強制的に解除しました。そのことで青山学院や関東学院のような事態は避けられました。しかし神学校が国家権力と結託したと批判され続け今日に至ります。また教団総会、教区総会も暴力で紛糾し空白期間が続きました。この傷は癒えぬまま今でも日本基督教団の中に根深く残り、教会を重視する教会派と社会運動を重視する社会派の二極化の構図が続いています。これはもちろん当時の社会情勢もありますが、やはり教会の未成熟さを物語っているでしょう。わたしたちの命の源泉である信仰抜きにただ生活、教会抜きにただ社会活動だけになってしまうならばどうでしょう。それは単なる人間礼賛、自己栄化、そして枯渇の道を歩むのです。教会は世俗化し、ただ人間の集まりになるだけです。この傷を今も日本基督教団は抱えています。

しかし教会は本来神さまとのつながりを持つ場所です。そこにわたしたちの豊かさの源泉、富の源泉があります。神さまはそのかけがえのない宝、命の源泉であるキリストを惜しまず与えてくださいました。このキリストに立ち返らなくてはなりません。今からでも遅くありません。悔い改めて神さまに立ち返り、そこに溢れ出すキリストの福音、命の源泉をいただく時に、教会はその豊かさに溢れ、惜しみなく与え、この暗い時代にあって光となって輝き続けるでしょう。それがわたしたちの生活、この世でキリスト者として生きる「いろは」基本なのです。